

由亭馬琴戲序文集

完

御子神文庫

第 第 共

函 號 冊

柳田文庫

文庫11

A1100



文庫11
A1100

曲亭馬琴戲作序文集

御子神藏書

渡部白鷗纂輯

第一 四屋敷浮名の添付

狂人と逐ふて走るものあり。狂ふはゆきゆきとひとども。その態狂人
に等し。童子の為し書と綴るもの。貌既老とひとども。そのはけ所童
子に似たり。視るもの愚あり。必は是は笑ふ。その智ふ及ぶべく。
其愚ふ及びが。余童子の為し書と綴るもの。未だ嘗て童子の意と
得む。多くは以てかきとせしむ。吁實ふ難哉。

第二 書名知まじ

現や里巷謡の曲も。由来れる所なり。きまむむうは物の本。竹取大

柳田泉文庫

和伊勢物語ハ歌より趣向と産出せり。今又是と父母とて思ひはるる
手廻唄一ニ御代の春毎よ。つらもつらぬ六またの繪草紙。七ッ八ッ
たのふた事なぐ。九ッあゝ。新板物。十ッう。貸ま。此主。誰と
書れてきたぐ迄御評判と希ふ。板元の口上き。筆のほづみ。拍子よく。
漏さぬ序文九文。ふ任する画工も。なみどち。食さう。ゆだて。つらと。
年の宝珠のたき。椿八千代の後きを。壽くとりふ。

第三 書名知れぬ

釋氏とつと定規と。老莊とて準繩と。作者が胸の匠と。はのり
細工よ手と組のの。削るが如き敗筆。只おしくと果敢と。ぬ。鋸る。と。
みんう。錐かん。なで綴る。訛言。鑿よ。三十と。う。の。繪さう。一。勾尺。は。え。

師匠ゆるく。獨りま。り。げ。さ。よ。ぬ。馬鹿物と。人々のども世渡りの。足代踏で
人あみふ。作料。それを。已。られ。老。犬。厦。高。樓。の。め。を。な。た。より。鄙。の。田。舎。の。白
屋。まで。言。の。葉。よ。述。図。よ。ら。う。い。一。鶴。山。と。題。す。れ。ども。高。く。ら。う。ぬ。も
て。り。を。び。或。は。年。王。その。本。あ。と。ふ。き。ぬ。その。あ。ら。め。や。と。手。前。勝。手。と。夕
仕事。内。造。作。よ。手。間。づ。つ。も。請。負。普。請。で。休。ま。れ。ど。下。拵。の。草。稿。と。や。つ。と
画。工。よ。と。一。つ。霎。時。煙。草。よ。ま。る。と。た。る。千。歳。の。命。と。延。ると。い。え。ん。飲

第四 伊達模様判官負

夫土手馬と葛西の陽ふ繫ぎ。又牛島とそうせん寺の野よ咄たる。むじく
文治高尾ふ義經の。浮名流せ。衣河汲と。も。竭。ぬ。泉。三。郎。忠。衡。が。精。忠。ふ。説
諦。たる。黒。白。論。碁。盤。ふ。頬。杖。は。く。と。男。之。助。忠。信。の。獅。子。奮。振。の。ゆ。事

師牡丹ふあゝそは頃の紅葉豆腐も彼君ふ些由縁の三郎平。こゝる浮
世ハ渡平ガ鉛。ぶつまり坊の弁慶。その隠宅ハ道哲庵。むきぶる露の
みちおくの。あゝ木とやぐて二本ガ隠謀。推名の術の鼠。う。化け。いせ
源九郎助。夫婦狐ハ赤の飯。姪女片岡ガま。炊ハ君ガ為ふといへばふ。
岩手の局狼婆々。伎倆ハ山と山ごり。は。どのあ。う。尾の長物語。馬鹿
ーのと思へども。獨りかも寝て。う。され。糸。今。茲。も。筆。と。る。の。あ。し

第五 膏橋河原祭文

聞しめせ。あ。ま。ど。この春新板物。趣向ハ浪華東堀。ぬ。い。案。ト。も。何
良。作者の箱と室咲の梅。より先。ま。賣。出。ハ。皆。さ。ぬ。い。ぞ。ん。ト。板。元。さ。え。よ
所。う。と。と。名。み。ゆ。油。町。う。思。ひ。ほ。く。油。屋。か。深。久。松。ガ。仇。ま。浮。名。の

世話時代。年々。さ。い。り。ん。相。似。た。る。一。夜。づ。け。や。ら。門。附。や。ら。年。頭。歳。暮。の。間
ふ。合。せ。ん。と。画。組。書。入。何。も。彼。も。一。荷。ふ。受。む。野。崎。の。急。作。あ。ら。ら。山。と
山家屋の推菟塔ハ詞の質種。金。敵。と。恩。義。の。實。事。う。ぐ。れ。勸。善。懲。惡。の
世界定の幾筋書。宵延の燈心費。を。甲。斐。ふ。立。滅。の。せ。ぬ。六。冊。續。ハ。今。茲。で。到
頭。三。十。三。年。ま。ど。輾。さ。せ。ぬ。合。卷。の。業。ふ。入。と。ハ。業。ふ。徒。ふ。戲。作。の。口。調。と。漫
み。序。を

第六 女夫織玉川晒布

曉の馬の鈴ハ新驛泊の目と覚。晡の辻駕ハ堀の内詰の足。代。と。り。或
ハ玉川の鮎獵。ふ。雙。郷。の。靖。輔。を。音。げ。と。あ。ら。ハ。矢。口。の。新。田。戻。よ。池。上。の
酒。徒。と。り。入。往。も。光。陰。還。る。も。月。日。仇。よ。過。る。と。惜。氣。も。ま。く。人。さ。ぬ。ぐ。ふ

樂もの。ゆるぐ中ふも小家の珍説。叔此世界へ磯貝島川いとも知ま
復讐の故と祛て新く筆織成。作者の調布實う出さ嘘と白思ひ
つく間もゆるぐを。颯と趣向と練揚。おも勧懲の一端機きりつ
りふ丁々と表紙の例の摺附ふと貫きとぬ緘糸も長ゆる二丈六冊
の製本頗張込。永壽仕入の正銘正札筆耕あつう徳用向憚
ぐ外々と。見ゆるべの上おん求め。なされ下さるべくといふ

第七 のろまご紅葉の合傘

故と温て新を知る。土手物買ふ似たるべく。隠たるを顕し奇を行ふ。
小説者流の僻事あつん。年々歳々作相似たれど。再々念入趣向同ト
らど。オウのもオあたる。好む物を上手あはと。書肆ふあごうけられて

頗兼が北畠伊勢の國司の時代物。おほど勸善懲惡など。の。大きふお世
話場とりませ。筆の笠屋の三勝咄。些少画工へ詠の。朱書のあう。半七
が。七うへ足らぬ六冊物。雅俗今昔合巻の。吉例、うらぶ今茲もあつて。
屋根白妙ふ霜降月。あついの堪らぬ。つとひまうせと。墨さうくと推摺で。
女房寝さんせ今宵も夜延。大そういそぐ不動明王の。利益よりつと三日
三夜作り出せ。おの冊子。亦まんごうでいあはど人と。いひ則善巧方便
まづ板元ふ勢ひつけん。とおほでも序おやと戯れと述ぶ

第八 梅櫻對女兄弟

世尊の妙法三世と説く。輪回の車の輪の如く。垣地滑途りつ。又。犬の
糞の上まを。相環らざとりふとあ。抑々何と。三世とりふ。未来一世。現在

一世過去と合せて三世あり。是とまぢうく身ふとれば一日の中も三世あり。思ふてせぬが是未來。そのまるとたが現在。いま果れば過去とあり。豈帝前世と今生と後世のみと。三世といをん。善惡迷悟初一念。未來より来る現在も。きのみりる過去のまぢやと。思ひまゝの過一頃。種月牧之が旅宿の夜話と。種ふ蒔繪の下地筆。天田屋野梅が香と。彼袖助が三世の奇談。ふ詞の花と咲せくも。尚含ある姉妹が。三國巔と裏富士。甲斐と越後の割外題。まぢうく一つ方寸の六塵五慾と拉ぐ。是も勸善懲惡の端あるべしと自序しつゝ

第九 辻花さうし

智者仁人の世と。うまゝみで。後生まを哀憐む紙。大きふお世話とりつゝ

勿れ。楊朱が白糸と見と悲し。只それ染り易きが為あり。墨翟が岐道と見てらち泣し。迷んと思へばあり。朱小交るその赤くるり。團炭屋の傭工黒くるる。十善海道三惡道。右乎左乎彼方。是方。問ざるきたる必を迷ふ情の染ると色とりひ。道は暗きと迷とり。説經俗談多う中み。阿讚茂平が情縁の艶曲。既ふ二本あり。あつとども非義の情不縁の慾。摸擬まべつとぞ。今その胎と奪ひ骨と換。忠臣烈女の事と綴りて。書肆の譴と塞ぐのみ。閱者そは序と固しとせで。よろしく奥齒と齧りけく。高評を賜へといふ

第十 緑むまびふみの定紋

邈古の千劍破たる神の世。ふ教一鳥の跡。認め果は浮名の手習ふ。恋のい

ろはの浄書とあげく思ひの敷くと。浚草紙も五六冊が七吉三がらぶる
草さつらべちち判兵衛もむらの廊ある本郷の八百屋萬の神あらし
棚あらしとそいそぐき睦月のころの松竹梅湯嶋ふうけ額風爐の
釜屋碓兵衛が山ゆえに花いろ色悪二枚目の小判の舌と富樓那の弁長
坊主吉三が今般の癸心懺悔々々の河洗垢離ふ六根清浄吉祥わん縁
生めでたえ土左衛門傳吉が俠氣も稜のさとなる盆前の備阿針と兼帯
ある下女のお杉をかよびあはた檜木不動の灵驗利生不思議もられはあ
トの舊兵衛素生と問へ下野や室の八島の夕煙絶ぬ古跡の掲焉縁起
端談後妻のが篋が胸へり利の時代世話ある新趣向長物語と断縮短
き毫み自序まとのふ

第十一 姫万両長者の鉢木

木佛と焼て霜の朝と凌ぎへの悟りまださる悪洒落もて盆樹と伐て雪
夜と暖めへのせんうふさの心馳走あつる苦くも降来る雨りみとの
崎さの渡り小家もろくぬふと詠たり萬葉集ふ歌られを駒と
めて袖うち拂ふのげもなりさの渡りけ雪の夕ぐれと摹擬られさる
されば詠歌ふ等類なり其角が白集ふ兄弟ある物にか對らる似て非あ
りそのころ小趣向なるびやいと思ふ物あり凝らねども薪に樵う鎌
倉と小田原ふせ北條時代記佐野常世と次郎左工門よどりも直して
かたつちとゆりの色は八稿の嬉手小實登る姫萬両の妹伏の縁目物
まがら忠臣節義の鉢の木と並立する室の梅五鬢の小松あはまぎて櫻

小壽こじゆく新しん素そ新しん板いた卷まの端はたの半はん頁げつハ画え工こうの可か寸すん利りと吉きち例れいからうは。序しゆらう
以いことと序しゆめうて序しゆま

第十二 多たねむつり願ねがひの糸いと竹たけ

みふぬみふぬ凶こ存ぞんむうしくむうしく芦あし分ぶん散さんる浪なみ速すみ津つ小こ椀わん久きうといふものものののらう。親おや椀わんの讓じやう
りて受うて重ちゆう箱じやうの家いへ富とみ榮えいたるままく小こ。汁じゆ椀わんのあうあう瓜うり知ちるとして。知ちらざる
ととひひ血ちゆうとせよせよとの教かくと忘わすれ。抱か屋や敷しきの坪つらの敷しきより。壺つがの碑いしぶみちのくま
らで。未まの弁べんのままを松しょう山さんよ猪ちゆう口こう々々通とほひひとめめダ因果いんぐわい。中ちゆう弁べんの中ちゆう宿しゆくへ
井いをぬりて。腰こし高たかののわうわうくと疎そふふ。手て塩しんふふううけけ子こ血ちゆうををああけけれれど。焼やき物ぶつ
血ちゆうののちちたためめのの女によ房ぼうととまま得えりりるる。箸しゆうみみももかかららぬぬ浮う名なと流ながして。本ほん膳ぜん
の善ぜんととうう失しつひひいいららう。浅あさ黄ぎ木き地ち蠟ろうや浅あさ黄ぎ椀わん。黒くろいい蠟ろう塗ぬででららううくく廓くわくららよ

ひ盆ぼんののままひひ物ぶつ在あひひと世よふふ唄うたふふ願ねがひの糸いとの二に上じやうりりも。鉾ほこ子こととめめくくくく一いつ趣しゆ
向むか。本ほんづくづく所ところをを勸かん善ぜん蝶てつ脚かく。二にの膳ぜん三さんは善ぜん惡あく邪じゃ正せいの次第しだいと分ぶんてるてる献けん立たても。即すなはち
席せき料りやう理りの急きゆう拵しゆうふふ。腋わきをを盆ぼんのの腋わき目めもぬぬ。戲か作さくも名なめめ大だいひひ附つ真ま
名なるる假かり名なつたつた思おもひひはたたの音おん訓くん交かう湯たう桶ばくとみみ。ささららててももららううの筆ひつ畊かうふふ
つらう丸まるの盃さかづきで。三さんの三さん冊さく合あせて六ろく冊さく。時とき代だいままどどの世よ話わたたららうう。昔むかしく
食くせる新しん手ての振あ舞ま。ううらら所ところの誨あててたたべべ。要あ時とき机きの大だい胡こ座ざ夢むの世よ中ちゆう
寝ねても居いられられぬ。秋あきうう仕し込こむ切き溜りゅうののららうと附つ込こむ去こ歳ざいの成なり声こゑいいと
く椀わん久きうの草くさ紙しささううと評ひやう判はん。ううららううく頼たのむ奉ほうるふふぬぬん

第十三 やゆと莊ぢやう子しててのの花はな簪ざん

一年三百六十日。長い月日と思へども。元日げんじつののつつけ間まよようう。ちち大だい晦み日じつ

の地尻ふらう。喜樂と詔バ相店より憂患との合壁より。禍福吉凶
 善悪邪正甚相遠くは是と左右の足ふ譬ふ。左足進め右足止り。右足進
 め左足止る。善悪もまごかくの如し。一善進め衆悪退き。百福来れば
 百難息む。あくの塚と免るもの。聖人といひ佛と稱を醉生夢死の衆生
 の上品。蒼隸百々夢あるもの。大往生と遂るふ庶し。感トて動き動て萌
 ま。一念あふ起るとたひ。善あもあふべく悪ふもあふべく。禍福吉凶招
 く不随ふ。進一止念々無量業報のそ中みなり。されば釋氏の輪回
 の説も。又莊周が蝴蝶の論も。迷ふと悟るのあつと出む。太子の夢殿廬
 生が邯鄲。大覚のつと大智出づ。それ初夢の富士。不鷹。茄子も及ばぬ。江戸
 紫の摺附標紙の合巻の冊子。ふ莊子の蝶昏の筭。飛で出るとい昔の小

唄菜の葉ふ止れも五十年。工夫小枕を推ととい。亦嘘をうつらう。作者ので
 たらう。狂言狂序も本心違ひを。只勸懲の趣と述ぶ

第十四 今戸らやげ女西行

浮薄貪慾世渡りの一本綱と踏外して。世小捨らう。白徒の多く。富貴利
 達と壁と見て。天命を知る世捨人の鐵の草鞋を索ても稀あり。さればこそ
 何と圓頂黒衣ふ彼一蓋の檜笠。且一條の竹杖突て。旅より旅小乞食と
 して。歌を詠ねど貌のみ。西行めうを事の易く。閑居垂帷小戸と出ねど
 も。居まらうふしに名所を知り。酒も喫升鮮魚も啖へど。よくそは言と行
 ひの。西上人は耻ざるもの。寔に難き所為らうべし。宜あり。今もいひへも。
 眺る富士のからう。糸と寧高きふ誇らんよう。低き小遊ぐらぶまげあ

ら。思ふありと善知識めて。話説を輪回應報の。おせ物語も勸善懲惡。今茲も程なくを竹の。トよ作りは急案ふ。古人けの子が佛と。うつせ
一女西行の。雛雛の昆布また海鮮の蒲焼皆似て非なる物の本。といふも
へどもつらまへも。世よ捨られぬ用心ふ。随分念入自序まらふ

第十五代夜待白女の辻占

人小八字の生来あり。命小八位の東西あり。そは吉凶よ任まれば分と量
ろふ足らざるこま。貧富の際も惑せし。彼天命と樂しむと。名づけそ
知命の達者といふ衆人多く。是と知らば。命吉ある。愚福ふして。春壽ある
の。その甲斐ま。命凶あるも。夢始醉終。役々といへ。煩悩たえ。づの
への人は。是と曉まふ。人は一期と夢よ譬へ。枕中記の一篇あり。又槐安が

一紀事ありて。窮達栄枯得失の。理と説くは。精妙あれども。讀ぬども。ゆ々
蝴蝶も華胥も。迂遠と一足飛ぶ。推さる。なる。這冊子へ。正月二日の初夢
も。大晦日。小假寝の。久松もど。夢あども。見せぬ。作意の。魂膽と。邯鄲ふせ
一悟道の。捷徑。るど。野暮な。筋夢中。趣向の。婆娑羅婆底演。ころの。夢と
を。啖といふ。御託。城白澤。模枕。到底の。大笑ひ。室船。なる。れども。春の
睡の。目覚。一。今。茲も。か。つ。ば。戯れて。序を

第十六 大師河原撫子譚

夫陰徳。一耳の。鳴が。如し。已ひ。り。知りて。人は。是と。あ。る。ば。余り。といふ。と。必
陽報あり。又。隱匿。へ。軒睡。の。ごと。已。覚ら。ば。人。是と。知る。這。と。り。て。必
を。惡報。あり。善と。作。ま。ふ。大。あ。ら。む。と。己。と。ま。る。と。惡と。為。ま。ふ。小。な。る。と。

とて行ふとまうれとふ。古人の金言善惡の報りる事。譬へ響音の物小應むるふひと。蓋君子の人との鏡と。前車の覆と見て後車の戒と。遠き慮のつらたへ必近き患なり。あく小著を物がうり全部六冊へ義夫烈婦の復讐をけ揚焉と述因果觀面の道理彼浮屠氏の説は根きて命て大師河原撫子譚といふものあり。

第十七 白鼠忠義ものかこを

つと太夫が正本ふ。歴然と一著明きさくも坂田の金びくろ。顔の色ある赤本の時代は世話と撮合せ彼箱根く先とりふ野暮る趣向の化物語へむうふ異なる。戯作者魂膽智恵に僅小三文く。稍一條小綴りたる。九六の百鬼夜行より人むとあらたものいふと。人のいひらん人心心の

鬼をそけきふ繪師み寫させ詞は述て。嗚呼がまうも戒の端とをあらね。轉ぬ前の杖とをまりてくは竹の世渡屋長者が故事と磨きまかせく。この燈燭夜の錦の秋をらぶ。丁子頭も実と結ぶ空をねる。一の花の春。あくふ壽き序まるといふ

第十八 殺生石後日怪談

石と鞭て羊とるせ。道士の杖狐と射る石と奈須野の勇士の鏃。其の唐山の列仙傳山海經は封神演義らとい。天朝の下学集。實事放虚説。攷むらより。あくふ傳へく三國妖狐の。こつりふる怪談と種。小後日の殺生石竹をの撫子の主従と。あま又と削る女武者かぬ操の常夏と。名をかされも諷詠の。うらへちる。花ある実ある。彼鎌倉の大臣の。その。ぬの。矢をみ

ほくろふ眩當けう人ふ霰ふぢりる那須の篠原と詠またる名歌ふ携る
狂詞の漫吟炮烙の孤色ある米のうへふ霰まらる豆は塩打と戯れて
春雨の徒然とみぐさ草紙とまるものなううー

第十九 同續篇

戯作者をうう羨しううぬを結わらうト。人ふ巢立のうを結わらう
鳥放とわのらうよ。群雀の惜々たる奚ぞやの中ふ雛鸞の遊ぶと知らん。
結期の蠢々ある争う合壁ふ潜龍のらる孤思つん接輿り歌うづを筆と
擔ひー一老夫のそ。伯鸞の五噫誰う杵臼の下ふーを徴めん。あまふ由て
おま紙觀とべ紙屑籠ふも方金らう。芥溜の隅ふも鼈甲の折るたよらうば。
そお隠さうめると顯しうらやと行ふものと小説といひ。又草子物語といふ。

聖人のせざるをう。狂簡子の耽る所作家の祖師と原ぬれば。莊氏の寓言釋
氏の方便実う出さうそ鳥の百轉も知る人を知る。是も勸善懲惡なんど。手前
勝手な非ふ理とつて。筆ふ無益の殺生石。後日怪談第二編。おまよみ本
と合巻の冊子の合の狂言綺語。届ぬ智慧ふ継足して。書肆の謹と塞ぐ耳

第二十 同續篇

怪力乱神聖ハ語らむ。妖怪變化奇異の事。必むなりといをまくまを。
今眼前よ見るふよふく。必まーといをまくまを。既藉が悔といふへ。乞
幽冥の物出沒非常是聖人のいをざる。所以衆人へ奇好むのみ。愈
怪談と聞まく欲して怪物と見る事。も憎めらる感之。國家真らん
とまるらたへ必先禎祥らう。國家亡びんとするらたへ。必先妖孽らう。

禎祥妖孽非常の物。禍福吉凶前より以て天誠と垂るると知らば。徳と脩
 りて穰ふふまらば。おの餘へ多く狐狸の所為。亦怪むふ足るものあり
 也。設夫浮世を觀ざれば。天變地妖の氣候の不順變化の天地の運行よ
 て。物も化びていふとあり。そをいひふぞと推てを見よ。春の毛虫も
 蝴蝶と化け。冬の腐草の堂と化る。鷹鳩と化け。田鼠の鶉雀の蛤。海蛇の
 章魚。枚挙るふ違ふは。是らそのく屑もをりぞ。媳婦化けざれば。姑
 まく。女婿高老と歴て舅とある。残忍不仁も心の悪鬼。怒罵悪言の声の
 夜叉。人を見くくは。巨天窓へ俄頃富漢の化ふるありべく。額ふ角ある十
 羅刹の焼餅家々の化ふる。疝毒入たる獨眼入道。墀々見越を轆轤
 頸酒肆の脊門ある。得利兒八百屋へかう豆腐小僧。いづと化物もろぞ

りる。そは怪談と旨とせし。後日あるの殺生石。玉面九尾の事ありふ
 たる。奈須野のちろは稿もま。初編二編と綴りし。ちや六七年打捨
 て。夜明の幽霊見るごとく。立消ある筋あり。後の趣向と忘れ水。だろく
 急ふ三編の催促日々。逼詰る。穴も入られぬ狸毛の禿筆。とやらかう
 やら書ついで。書肆の責と塞ども。透間の多き一々。稟。ちやいと山と山
 口。画工も。馴染の一筆齋。歳々年々。咲ふは。花の大江戸の名物と。
 ホホ敬て序あると。恁あり

第三十 同續篇

君子の遊て泥ま。細人を遊て歸ら。遊遊おのくそは差なり。西方聖人
 の方便よ遊び。漆園老爺の寓言よ遊び。晋地の杜預が春秋左氏傳我

邦の圓珠の萬葉代匠羅漢紫式部の野史物の本。智識真人風流才子の遊ぶ所異あれども。真俗深意通用して。その趣と竭さぬへま。かくて今吾遊ぶ所亦是遊戯三昧にて。遊戯のうちみ真如なり。真如の隠れて他行と推へば。人這真と知るもの早あり。それ知るとあはざるると五篇を眷念せん。這書も既よ三篇をまらつて。吹煙休暇の程もま。四篇の催促逼迫ても。御邊足下の切口状めて。手がく延て逃もせぬ。獨苦も獨樂む。苦樂の境界ある哉。現看官のたのみへ。吾苦中より出る所。苦中も樂なり。樂中も苦なり。嗚呼苦也樂也。ま有漏あり。苦樂ふらるるごとく。忘ると後よ。そとめて真如の真ふ入るる。

第二十二 同續篇

著述は宜しう。時分多くなり。大風大雨雷鳴の日。家内の小恙。口舌はゆへ比屋の三絃吹播醉狂小兒の發憤來客の長死。皆是作者の禁物あり。又尺あるらのみ。ふもゆる。三伏の暑き頃。兵牛の月。喘が如き。六月の筆も把られ。障子紙門を開き。蕪居と一々。郭形の天と。晴りて消き目へ。心神洩して。氣も鍾ら。かゝる折。小一行でも。文と綴る。小懶きものあり。又玄冬の寒き日。硯氷り。指龜りて。彼宋人の不龜。手は薬と。欲しと。かり人ど。馬鹿も用る。茶と。そのふらる。と。あけまを。水涕落て。料紙と濡し。夜並よ油と費せども。龜屈ふ。よろこ果敢。ごらむ。か。れ。二。三。四。五の月。又八九十の間。をりて。著述の時と定む。ま。ども。花咲。ころ。心。浮。て。無。籠。居。る。小。倦。日。も。なり。四月五月へ。徐々。と。蚊。ふ。責。ら。ま。と。夜。延。ら。ま。む。

あれと除けば年中不寫く日へ寡く。休む時多う。おの故ふと々年々歳々。書肆の責と塞をうねていうで己んと思へども。己させもせぬ。休られぬ。曰くのりるといふへせん。去歲の秋暑も殊更る。後の月見の比よりぞ。猛可仕入の殺生節季晩發取承知で五編の急稿春の初の間は合せん。と。夜と日ふ絶いで廿日ゆまうふ。綴りまのせむし。

第二十三 傾城水滸傳

源氏物語とよまひて。漫は源語といふものなり。漢土の俗語の解せ糸ども。猶水滸傳と剽竊し。その少くも。何とあれば。おの二書や。考抄通俗あれ彼と。釋解多きふらうあり。然れども水滸の如き。一。百回のみうく。と。皆悉く取そのあけは。可憐趣向と婦幼の觀物。

よせぬが遺憾さふ。今截ふ此書と編う。さへさうまう。毛唐人の陳奮漢語へ摸擬し。要ふ。因て天罡地煞星ある。一百八の草賊と賢妻烈女と綴り易へ。傾城水滸傳と命る。一。濫觴は室津海ある。遊女長が事と。その。且。掠稿の龜菊。高俵に似れを。かくて華洛の綾校と王進は擬まる。又浮潛龍衣手と九紋龍史進は擬した。此他越路の今半額戸隠の女鬼等。陳達楊春に似たるべく。又虎尾の櫻戸。林沖は相似たる。花殼の阿達尼。魯智深は相似。折龍の節柴。柴進。たぐひある。枚拳は違はら。此冊子の初編のみ。是より。の後春毎。毫と接條の櫻木は鑄出ま。きんはふん。

第二十四 同續

八百屋の賣物八百色に限らむ。学者の十千屋きれ物多し。大と語らん
 と欲されば。駱駝山鷄をとりつゝみさう。小と譚らんと欲されば。漁獵角觝
 の下段もりのうの。柔きことと好める人あり。笹の雪も數あるま。堅いもの
 と悦ぶ客あり。捧吞の喉もいさ。足らむ。神事舞のまらう。と。雲雀獨樂
 よりも速く。藤八五文の走る。と。機關泉も終ふ及む。されを去年の流
 行より。今茲の不易。また。是より先。昔せし。傾城水滸の
 初編の評判より。野と聞ば。櫻木は鑄られし。甲斐をやり。ちりつゝ。右を
 と。継三弦の。三まち四條の。燈心もろとも。氣根と減ら。夜並仕事も。癖
 の。憑らう。づらひ。本店。遅い。兼知。やろ。れど。鶴屋。頸と長く。して。
 松は。壽く。千世。萬代。春の仕入。間と合。たる。ごう。く。急々。如。律。公。覽

の通り女オふく序を

第五 同續

近江州伊香郡ふ一座の山なり。俗は是と志津嶽と喚做し。此山や
 琵琶の湖と面みして。余語の湖と背みし。只是のみふ。り。び。して。余
 吾飯浦の二大河なり。山前山後と相遠りて。其末は越前ある。板鳥の方
 へ出ると云。その山島峯あり。絲ども。其景勢へ唐山あり。梁山泊ふ似と
 らん。歎。より。て。今。此。冊。子。ま。作。設。て。彼。所。に。擬。した。り。近。世。寒。葉。齋。綾。足。が。本
 朝水滸傳と著して。近江の某の山とめて。梁山泊ふ比せし。塩焼王の故
 事と合せし。渠竹生島長命寺の。島々とめて。せざりし。皆神佛の。灵地
 ありて。ま。の。も。梁。山。八。百。里。の。い。と。廣。き。ふ。似。ざ。れ。ば。あ。ら。ん。そ。の。こ。う。れ。か。く

ゆらと予も又此は意なり。且百八の強人と總て烈女を綴り易く亦勸懲の一端を。那時鎌倉の政子なり。京師の龜菊の女主と内奏より事起りて。終は承久の乱に至る。されば此時は方て義婦烈女の薄命なる依。水滸の一書は模擬するものなり。婦人への恰好たる所どころの多うと。どやうかうやうらみ附て。又續出を第三編の自注と自叙に代ると如此あり

第二十六 同續篇

或予は問て曰傾城水滸傳は何の爲りて作らる。予はと答て曰。爲生活は作らるの。夫儒佛巫醫百技の徒渡世の爲は。あるもの。陋拙杜撰も咎らふ足らざ。況稗官无根の談雜劇の脚色も等きのみ。さういふれども

作者の用心聊亦見らる。きそのゆへ。彼清の逸田叟が女仙外史の一書と見ぞ。燕王の反逆と心誅せんと欲する爲。小閨軍女兵と鑽出して。妖婦唐賽兒。勤王の小説一部とまざる。彼は則妖婦とて。正法とて。燕軍とて。外道とて。廻あれと水滸傳あり。草賊とて。忠義とて。搢紳とて。大賊とて。なるより。ふ比は。そは勸懲。延巡あり。あはよりのあれと觀る。亦此傾城水滸の冊子も。作者の用心知るべきもの。事と好て思はざるもの。評をききと評せざりて。私論臆談烏夜の銃炮も似たる批評も。つとど。毀譽褒貶の争ひの起る所。吾只避て通さんとする。成らざる譏れと古人ものひたり。彼物論と齊う得せざる。鵬と斥鷃の類は墮へ

第二十七 同續篇

著述の勞い看官かりのむ。譬を田翁苦辛の粒米。鹽一りりて。雛狗の
 五器へ投ドて省ざるが如し。嗚呼書作るに難くも。何れも。いふに
 名人才子も。漫ふ剽竊模擬。まるもの。皆等類と免と。只よく奪胎
 換骨の手段。造化の巧と欺く。接木の花は異なり。彼桃より櫻と
 開せ。積みて丹楓と染さる。看官はその莖と忘れたるのみ。あつて
 て。樹も亦已が根本の他木。あつて知るより。何れで。花と呈し。実を献む。
 らね。奪胎換骨の。妙巧といふ。あつて。かといふ。傾城水滸の一書も。
 亦その手段。接木と等し。羅氏の水滸と。莖ふして。作者の趣向と接合
 し。兎園冊子小盆と。裁て。書齋の室に。養ひ立する。是を五編の花の魁
 縁日ものと同様。安がうれて。骨折の甲斐。あつて。いふ。仙鶴堂が。氣と

春袋の上本より。何處へも。融る。吮包。あつて。あつて。東あ
 久し。作者の常盤木。今茲で三十八ヶ年。休まて。續く。筆真加。商賣真利ハ
 板元の耳たぶく。溢る。迄。愛敬られ。と。壽て。序を

第二十八 同續篇

余曾かの。水滸傳に載る所。張青孫二娘等。十字坡に旅客を。唇り。も
 て。肉包と。嚙む。の。一回。その。枝。害。殘。忍。あ。ふ。妙。の。極。ま。る。便。是。異。邦。の。衰
 世。兎。賊。の。つ。ら。き。所。尤。讀。み。忍。び。ざる。もの。也。且。又。武。松。が。鴛。鴦。樓。の。張
 都。監。蔣。門。神。等。を。鑿。する。如。き。その。殺。戮。數。十。人。僕。隸。婢。妾。とい。ふ
 と。い。ん。ど。も。一。人。と。て。免。と。す。只。是。人。を。殺。し。火。を。放。て。愉快。と。する。の。の
 情。態。と。寫。さ。る。の。も。あ。は。れ。義。勇。と。ま。す。開。威。天。朝。の。人。の。氣。質。の

萬邦小捷きたるころをきく。就中曾我胞兄弟が富士の狩屋よま
 だも入りて。父の讐を撃つが若き。當時宿直の勇臣等の防戦するのふ
 當りて。是を斫ることもて十名然とも僕隸婦女子と屠殺しと及と
 汚さんことを欲せむ。あの故み時致へ五郎丸も生拘られし。是の智勇
 の足らざるみりしを。蓋五郎丸が少女子の打扮して。よく欺しふらそ
 る。此時尚武松とて時致に代らしむ。五郎丸も亦免るること成
 得ざる。又水滸傳なる武松が蜈蚣嶺を過ると。道士師弟を殺
 せとかゆふ。新し得る戒刀を擧りて祭らんと欲するのみ。いまだ
 彼師とそれ徒弟の悪人あると考へて。何を殺すとの速らるや。
 ひり筑紫の御曹子つることあり。吾千軍萬馬の窮阨の中よあ

里とつと。當の敵よりうざれい。いまだ嘗てと射む。勇士の
 本意とまる。當まかくの如くあり。今その忠孝義勇と奉る。水
 滸一百八の草賊等。比競まきよら。夜光燕石相似て非る。
 此を述ぶる。抑余が戲し著せるあの冊子の水滸傳
 ある脚色と撮合して作るもの。かどが理義は違へる。綴り易く
 是と取らむ。用意豈當是のみあらんや。毎回必むあの意味なり具眼
 の人へのつらう知るべし

第二十九 千代褚良著聞集

著聞と名づけたる書三本あり。古今著聞集二十卷の橘成季ぬりの作
 り。又新著聞集十八卷の寛永二年の春出たり。又近世江門著聞集十一卷

い。寫本より行りも。是はよき俗書あり。今も千代褚良著聞集あり。夫
大江戸の方言よ。言浮薄あり。信寡く。多辨輕諾あり。尤まを命て喋
々郎と云ん。かくは這書もその類なり。根もまた説話と書癡これ
べ。僖名づけしと人僉おのん。豈然らんや。あつらんや。大約冊子物語のつ
まら無根の談あり。然ると只此一書に限りて。喋々郎とつら名とせ
や。今本集に説く處。孝子辛須賀千代松あり。不肖子袋田褚良太郎あ
り。一人も則至孝賢良。一人は則不孝兇惡。言行情態延延あり。應報も亦
同じのつ。便是作者の用心。總て彰善瘴惡の意。本流のつらとつらと
ふ。冀もあを繕く。童蒙此に恐嚇せしむ。善に進む。惡に遠く。無
明の酔と醒ももの。つれつとつ。所為よふん。されを編集著聞に倣ふ

て。長篇より短篇あり。尽んとして又起る。物語種々多し。れども。その先
千代褚良二氏の傳と。作設けたり。これを名づけ。千代褚良著聞といふ。又
辛須賀も鳥鴉あり。お紙慈鳥と云。反甫の孝あり。また袋田の梟黨も
り。此鳥も親と啖ふといふ。よて父久良布といふ。あきと。鴉梟の等し
是禽あり。然るも善惡賢不肖。又その親よりさるる。難あり。あは故に
曾子の不言乎。慎之慎之。出於介返於介と。己と責て始と慎と。まゝその終
とよりさるもの。幸ありて不空成就の輪回の説と免るべし。あは本集の大
意あり

第三十 金毘羅船利生續

虚談に異名なきなり。浮園家の方便莊氏の寓言。武士の武畧。遊女

の手管。叔商賈の空誓文。つゞまろ虚誕よららざりたる。虚は是実の對。して花ハ虚あり。実るま。邪説暴行多たものと善巧とつひ。戲謔と言。神道眞實。佛語ハ咄々。神釈兩部の乗合ある。金毘羅船と題する。標識を讚州象頭山鼻の先ある。智慧の海面。陀取楫任せらる。作者が獲手ハ帆と揚て。思ひはくゑと友筏筆。漕まろ。今昔和漢ハ涉る。毛少許類拔。彼天潢の何候王の。西遊記より故事附て。やうやく物ハ草稿の。かゝ代のむう。佛在世。何と。是もろの事。やう白。綴りたる。戲作も勸懲眞実。う出。虚をやら。神も照覽佛を見と。身ま。世ま。た。かゆ。う。か。う。羽織の裏と。鶴の脛る。長物語の。今茲初編の序。む。追。く。接木の花の春。幾編續く。欲其。処。ま。考。果。あ。た。の。う。千世ハ八千代を

かけ向も。う。と。み。か。あ。敬て序を

第三十 同續篇

む。う。浅井氏の御伽婢子の前燈新話と綴り。う。聊も唐真きこと。ま。く。む。本書と。ぬ。看官ハ論。ハ。和漢の稗史と好る。の。是。と。作者の働きと。此草紙も亦似たる。趣向ハ西遊記ハ縁るといへども。彼小説と同ト。う。ぬ。著述の苦心と誰う知らん。も。豆小眼。観ると。是。只兒戲の冊子の。千早振神。言左弊俱佛と。弄ぶ。ふ。べ。う。ん。又。う。有漏と見透。ま。の。狂。ひ。な。ぐ。も。成。佛。ま。と。り。入。踊。念佛の類。ひ。と。や。せん。その。れ。か。く。も。の。衆。か。つ。今。更。よ。ひ。く。み。の。れ。ぬ。金毘羅。の。初編。う。讀。う。二編。三編。幾編と。ま。漕

著る迄御覽とら。終よへ到る彼岸の浅井は類せる趣向をも人手ハ借
らぬ硯の海に深い意のゆく波よりけの港泊の日和癖。作者も癖おやが
のつづらで。おや又年づく精と出まへし

第三十三 同續篇

天朝いみじりり渡天の僧ふし。若くも近世渡天の作り。むじりく
三河の前司大江定基祝髮入道して法名を寂昭といふ。且そは道德碩
学のゆかり。天台座主は補せらる。三千の僧録あり。介後宋の天台山を
眼前見まくりしと。渡海して彼土に至り。然るに紙紙樂石橋の一曲ふ
又云々と綴り易て天竺清凉山に登りし事と。今這冊子は著したる淨
藏法師の渡天のこと。石橋曲の類と見るべし。嘻華胥南柯無替の事理

外の境ひは遊びつ。夢の浮橋桁を敷へて。事迹の有無を論ぶるのの柱は
膠もつみ似たり。将唐山の小説と。皇國の事を作り更らふ。彼と此と
物とね異らり。されば本書ふかきまされて。作意は自由と得難きを辛く
綴りたる。作者の苦心は十分あるも。看官ハ二分三分あるんと。をゆく時
好まらへせん。この勞して功多かるべし。鏤して利あらん。書肆の
ためし。亦いとてそのこととつみのみ

第三十三 同續篇

世は萬物の生出る也。愚あるは賢く。清らる濁あらず。中ふ
天地と父母と和合し。いと清く。と浄く。正気と稟く生る
のの。そは五臓も。清浄し。五臓の清く浄るのの。睿明ありて

命長く。生とまがらふしを知り。死しに亡びぬ。便是と神と稱へ佛と唱へ。聖人としひ。又その臣と賢者とのあり。余らば淨藏は一人の名にあらむ。神佛聖賢ありたる。皆淨藏といふのみ。あつたれども賢愚清濁是同根佛も邪魔も一体真如彼百怪の虚名ありて正覚も亦本来空迷ひなれば悟りも亦無佛世界は外道なり。かくもいへども知とくく。邁て無何有の郷人に問ふべし。

第三十四 同續篇

この書の初見したる日の神伽毘羅坊を征し難たむ。遂に釈迦如來の手を借て。西界山なる五行峯に謫罰せしめありし。是則西遊記に天帝孫悟空と征しつゝ。云々の事の如し。それを只文に就て見れば。

神徳還る佛力に及ぶるもの似たり作者の本意豈然らんや。夫日の神の至仁大徳前み對るく後よ敵か。あの故もつゝ伽毘羅を征しあらむ。釈尊あを征する時の君臣佐使の義分明かくて又釈迦如來もつゝ伽毘羅と濟度せむ。觀音大士に度せしめて淨藏渡天の次頁とす。もたし一段み至りて。獨觀音の妙智力釈尊もも優するが如し。豈然らんやあつらんや。君臣佐使の功一あり。然りとつゝも君位に在るもの。よくその功徳と統ぶ。あは仁に如く。大徳を徳るは似たり。看官悟らざ。甲しつゝとかりて難ざるの惑ひの。本編書肆の故りて。去歲に製本延引せり。今茲に六編のりともみ。賣出まといへ板のり好し半頁綴り易て序を

第三十五 同續篇

明の謝肇淛古今の稗史と評論して西遊記とて第一と爲す。初彼意匠
とあせしその書ハ既ハ五車ハ富テ。且易学説相佛經道書の諸宗旨と看
破リ。才ハ宛ハ二酉ハ過テ。將司馬班史と屑とせ。實ハ小説家の巨擘ハ
シテ。先ハ敵ルク后ハ對ス。あとのて士君子の爲みも。選棄られ。水
滸と共ハ並馳テ。今ハ至々盛ん然とも水滸傳ハ。人情と穿鑿して。罵
して人の性の善惡と尽したり。又西遊記ハ百怪千妖變化の不測と旨として。
彼情態と寫さんと單ハ。故を以て世の評ハ。水滸ハ不及と云るものなり。是
等の人ハ西遊記とよく視るものと云ふ。予も亦謝氏は同意とす。
彼書ハ因テ此書を著ハ。淨藏渡天の无根草と種藝るとす。小年なり。

大凡此の如き冊子ハ省官譏易くして。作者ハ做匠き所なり。其といひ。のふ
ごと推さる。初編ハ神代の邈然たる。婦幼ハ落と取り易く。又第
四の編よりして。異邦の人物も。ぎれを。皆是魔王妖邪の類也。次の巻ハ
とちけを暮ても。和尚と怪僧の。み。愛敬色気の。なる。の。生を。
閨秀兒童ハ今さらハ。生人を見るが如く。又西遊記ハ熟せる人ハ。
珍ら。げ。た。あ。と。やらん。か。や。あ。ら。と。案。ト。た。り。産
よ。易く。傾城水滸と共俱ハ。世の評判も。まんざら。で。第六編も。潜つ
けた。金毘羅船の利生と。靚面ハ。式。式。運慶春日の作の古物
より。此新作と。甘泉堂の。好。小。任。て。本編より。每編八頁四十頁と。上
套下套と。二帙。より。ち。上。本製の物柄宜く。外題と。春袋入り。到

底ハ竹馬の友網兒戲の冊子ハ物一げなる。序文ハ輪テ壹丁ハ述ぶ

第三十六 同續篇

邈姑峯々々是首らへ。昔より一々なりといふ野夫々々々化物とも策
子で觀まる江戸の朝勝彼漢文の蒼表子と大和錦繪の摺付表子と綴
易らる時好流行新奇も昔の相場うて。高きふ登るよ低きより下
学上達の資よへ。あつてきよものよつて保ども看るへ看ざるは優よりあ
れを童蒙這書と繕きて綱曳石投木登の惡遊戯易よとあり。抑あ
よ見一たる石折ハシテあり。淨藏へ即ワキあり。且ハ戒の悟了たる悟て
又了るもの沙和尚の悟定たる悟より定あり。皆是人の心よりあり。定
へ禪。禪も靜靜あるハ天の性。動きて變化する時ハ無邊無量の邪魔と

ある。變化既ハ極ハ魔も又成佛する時あり。誰うそ心上一。一箇の阿
彌陀かうんや。觀世音も釈迦如來も亦是人我心の本來他と求むる
て這身より。觀むる時と世音通む。機感圓通自在あり。響の物は應む
る如きと。名づつて觀世音といふ。心の常と如來といふ。心常なく禪定あり
は。終了悟の時と得る。伽毘羅の名義ハ這策子の第一第二の編
中に見えらる。夫金石の堅固かるも。火とめてあはれ攻れば。折もあつて。
碎るも易らる。がれば亦石折は修行鍛煉の別義なり。又淨藏の淨臍た
る。前ふもいへる。是心頭の如來より。迷悟の判る所あり。迷と
悟と賢不肖とハ我五臟の淨らると。淨ららざるよふららんののみ。迷ふ
もの迷ひ依知らむ。悟るもの悟覺を。迷悟兩らるる。忘れん

トめて維摩の室に入ると

第三十七 同續篇

西遊の一書。幻縁不可思議原何人の作るやとあはれ。陳元之の序に
 何侯王の作るやといひ。又尤侗もあれは序にて丘長春の作といふ。並にい
 まふ。的否とあはれ。元史の止機傳に處て。めて神仙と稱まといふ。尤侗が
 序に此義を論トて。言皆華嚴經中より取りめて来つといふ。そのいよく其
 隱微を發明して。その骨髄を得たるふちうたを。悟一子陳氏が評微り
 せば。疇や作者と三教の忠臣とも知らるるや。看官悟りて讀るん
 稀る。愈恠談の巨擘といつ。相看て噴飯を充るのみ。かくて吾此策子と
 綴るふ。とさく彼書と剽竊摸擬して。皇國の故事ふ縁るものく。亦

画虎類狗の譬は似されど。婦幼は諭し易うると言はん。お孫縑その思惟よ。今
 本編は説くところ。道士全真妖術とて。烏鷄王とあると三年。后妃も太
 子も群臣も。咸相仕へて疑はせ。その假と真と。知らざりたるは迷ひの
 王石下とび認錯て。夫婦枕席と俱みせ。母子亦胡越とあるは至り。こ
 ころは毫たうりも疑がらる。凡慮肉眼へ然もあらん。彼彌山の魔王の如
 き。天眼通と得たるもの。あうも父と認らざり。假とて真と。一
 看破る。その遅き。何ぞや。只是のみ。あはれ。又孫行者の岩拆ま
 ら。その師の真偽を認め。辨とて。咒文よりて知らる。神通不測の
 のとつとも。做とて。迷ふ。その求る。故に。較々たる真如の月
 と。心よ失ざるもの。一切衆生邪魔外道よく。這境界と解脱せ。初て

佛子といをまくの。嗚呼西遊の一書意味深長字々金玉と和解たる。原
本越よ四十二回本集やうやく第八篇ふも折々出る観音びくき扉ふ半
下取入とたる。序もて切て作者の本心生地露して述る事恁なり

第三十八 書名知れむ

作者の丹田稗史の種らう。蒔バ看官めといぐん。言葉は花と咲せくも。
實のらる趣向の得易うらむ。果敢多の業も三十年。勞して功もあは玉る。
今茲の世界と宵勘定よ積り雪のあること。謠曲よ本づく常世が勲
績。佐野の船橋纜よ綴りかゝり又さうふ。断離たりとも兎毛の筆と瘦
うらうらも左手よらう。錯雜刀よらう。ゆぐみー墨と摺減ら。時代
と世話と木よ竹と接りらなる彼の鉢の木。加賀よ梅田ハ草紙の魁。又

上野よ松が繪師かく故事附て越中よの櫻木よ鐫め。合せて三冊又三冊。
相違らうらざる自筆の序。行燈よ寄添ひ漫ふ述ぶ

第三十九 書名知れむ

福壽海より出現して無量感應の利益と施し。金龍山よ光と発ちて。慈眼
視衆生の誓尊し。浅草寺のむらう。三社の縁起と種とて。實うら出と賽
方便と亦六冊よらも船でま。あう物とら及びた。筆よ写して姿見の。
姥が池ようつと浅き。凡夫の智恵の矢隨身門。前編後編ゆたぬ事ある。
趣向ハ二筋とら屋の石け枕も動きをた。千代の始よ先いさむ。春の駒
形繫ぎ留し。注進の内田が銘酒と同名。宮戸川よ題されとも。都鳥よう
仙禽。鶴屋が懇辞さるよりふく。壁よ馬道無うけ。一夜づつなう急茶

まぐろ。世間あみ木の時代世話。十社の草芥鎌倉管領扇ヶ谷。末廣
巷路山の駅々。咲初。句ふ千本の花川戸。そけ櫻木。刺本の吉例。変ら
ぬ戯を述ぶ

第四十 赤本事始

昔へ赤本只画と宗と。然るも作者は丈阿らう。画作は富川吟雪らう。明
和安永の間。至て喜三三春町の両才子。そと多々滑稽と唱へし。今
に至て四五十年。流行既推移りて。猶且時好は従ふもの。新し走り奇
と角ふ。大根の切口。ぬしの根と来と。鯛の味噌酢で。四方の赤。子供衆
合點。飲く。の古風と物の屑と。とせ。越は古昔と原れを。月小兎の手柄
らう。花小花咲翁媪らう。雛養の狗の恩報。ト小雀のお宿と何處と問ひ

しも。皆是勸善懲惡の捷徑とて誨へたる。童蒙話と趣向より。綴るも
己が猿智恵と蟹味噌揚ぬ猿蟹合戦。奮節と温て新粉と知る。臼杵迄を
漏さば。取合されを。是も亦梅と鶯。楓小鹿。黒縹子の帯むらう。捨らぬ
その。今もか。飽ぬ。な。の江戸の花摺。付表紙の紅澤山。赤本事始
と命。物部らう。ね板元の森屋が需ふ。應ぶる而已

第四十一 漢楚賽擬選軍談

智者の自適して流行の先達たり。庸才の自適せぬ。人の遊ぶ所は遊びて。
常に流行と追ふもの。果敢な。冊子物語も。時好は慍へば行れ。慍ざれ
ば行まぬ。書林永壽堂あ。見ろ。やあり。傾城水滸。伯仲を。新
著も。が。予。請へり。き。れ。唐山の稗史。西遊水滸の二書の外。又

翻案をききそのなり。よろく漢楚の闘戦を頼朝義仲兩雄の確執に綴
易く。ゆへ這物の本を作らる。抑清盛の秦始皇に似たる。頼政の陳涉に
似たる。頼朝の漢の高祖に似たる。政子の呂后に似たる。時政義時の諸呂
に似たる。牧方の呂須に似たる。義經の韓信に似たる。よりの前輩聊評論
ゆると讀書者の話柄にまゝなる。只是のみよろしく。義仲の項羽に似
たる。覚明の范增に似たる。巴の季布に似たる。兼光の鍾離昧に似たる。伊
東祐親入道の田横に似たる。廣元善信の蕭何曹參と相似たる。成敗異同
ちろとりくとも。亦その趣をたのみならず。帝頼朝の臣時政の壻。樊噲の
如きそのま。功成名遂に身退たる張子房の如きそのま。智辯敵を欺く
ふ足る。酈食其陸賈の如きそのま。諸呂を誅して漢室を全くせし。陳平周

勃のどなたものあり。そは無きもの。些許似けり。たゞ撮合して。一人あると二人
の事と。譬ば下邳の圯橋の張良。牛若あり。孫バ不可あら。如し。蓋漢楚の
興亡の史記漢書の正史。ゆへ演義も亦綴りたり。そを又譯せし通俗の漢
楚軍談。まゝゆると。婦幼のなほ見まく欲せむ。讀とつども解し易く。ぬ。異
邦の軍記なれど。夫江南の橋の江北に栽られ。積とあるもの。便ち是
風土の妙あり。かゝる漢楚演義の一書も。予が架上に措きたる。變ト
本邦の軍記とならる。又是風土よるもの。實の時好み推當たる作者の
手津間とあり。孫バ

第四二 同續篇

和漢將相の行狀得失相似するもの。往々あるなり。木曾義仲の楚の項羽に似

り。さむと義仲の勇悍膂力項羽ふ及ぶ忠信器量ハ項羽は優り何となれば。義仲粟津の敗軍は疲勞て奮勇の氣力なく被たる薄鉄の鎧も日属の似む重しとのり。項羽は坂下の敗軍は漢の十將軍を殺す。人ふは境に入るが如し。只その真氏と相訣る。愛惜悲歌の趣ハ義仲京師と退くと。松殿の殿下の姫と。別とを惜るふ相似と。是より先ハ義仲の北陸七ヶ國を畧せし時。賴朝は其功と忌て。既ハ確執ハ及んとてけり。義仲あはと争はむ。且つらく。平家の大敵のまごさびせ。あうと今仇寛と討て。親族と戦ひ。志はあはらむ。その子清水の冠者と質と一つ。加旃をとり。諸源の起し。高倉宮の令旨よと。義仲あはと思ふと。その御子信濃宮と主とて。皇位は即奉ら

と欲せし。上皇許し。あはれ。義仲は憤恨。遂は不臣の罪を得。又項羽は各て功臣は與へ。約は背きて。劉邦を蜀漢は藩に就し。義帝を立て主と。終は是を弑した。是よりて。觀る時。義仲の勇悍膂力楚の項羽は及び。項羽の忠信義仲は劣れ。又あはる。賴朝ハ武略洪運粗漢の高祖に似たり。然れども。寬仁大度ハ漢高祖に及ぶ。漢高はよく陳涉が屠を立て。秦を亡むの嚆矢たるその功を賞した。介は賴朝ハ賴政の子孫は恩敦と。賴政ハ是賴朝と同宗より。漢高と陳涉の類は。妬忌餘り。賞罰正し。初とて。親族と。大國を封と。賴朝ハ則然らむ。叔父と滅し弟と

殺を罰重くして賞鮮し。譬ば彼章魚の足と啖ふく腹ふ充るを快しと思ふが如し。足竭るとたへ身も亦斃る。悲いなる義論かくの如くなられども。あつらひ漢楚の趣きふ倣ふく。勘定と合まるのをも。そと好とまる永壽堂。又あの二編と鑄んとく。請求ると急るまば。聊あれらの言旅叙て。虚實の界と明まを恁るり

第四十三 同續篇

稗史の荒唐風と追ひ影と捕へ泡を抓ひ尻と握る。報よりつと臭名の世に流るゝの素より論ま。然まども作者の用心。亦見るべきまそのまふよろく。便是その學術。浅深あり黑白あり。譬ば古人の名は嫁して。一部の小説。一種曲の傳奇院本と作出まふ。善人と誣て悪人とせむ。又奸

賊と忠義士とせむ。あましと作者の用心と。そは善人と誣て。りて奸黨と倣せし。その手習鑑の希世是あり。又奸賊と作り更て。忠臣義士とせし。その水滸傳ある宋公明阿波の鳴門の十郎兵衛白石齋の常悦是あり。そが中ふ。小悪を新ふく。良善と倣まの猶可也。善人多りしと作り更て。悪人と倣まそのま。非如その文佳妙とらふと。吾甘せざる所あり。抑這漢楚賽の響ふ一二の編輯より。義仲とりて項羽と擬し。かくて演義の趣は倣ひつ編りてゆくと。彼項羽が江の中は義帝を弑する段に至りて。毫と含く以謂く。木曾が信濃宮を立し。項羽が義帝を立けるに似たり。まらるふ義仲の初と推義は仗て。宮と帝位は即まらんとあむひ。あとの久し。上皇を議は従ひぬる。且倭臣知康等群

るものい。物の本は作者

曲亭馬琴

第四十五 新編金瓶梅

金瓶梅一百回清の康熙乙亥。敬齊謝頤あまよ序して。鳳洲門人の作
 とりひ。又鳳洲の手集ともいへり。抑々彼書は演たうり。則宋の巨商
 西門啓とりひのもの。一期娼樂の話說。そは九友應伯爵等と玉皇廟は
 義と結べると開場はあつる。その時武松が景陽岡にて。虎と搏する風聲
 らり。併は王婆潘金蓮等が。武植(武太郎)と毒殺の両三回。則水滸と同
 して。文と易たる処も有けり。畢竟水滸の西門啓と金蓮が奸通の毒悪の
 段と父母として。めて作り設けたる。但し武松が復讐の一條は。第八十七
 回は在り。是より先は西門啓へ胡製の房薬と過飲。遂は其身と喪

ふと。第七十七回はなり。是武太郎と藥鳩せし悪報ことりひ。張竹坡が評
 論へ。金瑞が水滸傳の外書批評は做らう。因て勸懲は傳會して。勉て作者
 と資するものうら。彼書の宣嬌導慾ある。君臣父子の間うら。讀べらうざる
 りの多くなり。然らうも唐山の書賈等。水滸西遊三國演義と金瓶依りて
 四大奇書といふ。願ふは文の佳妙あると。猥褻時好は稱へばらうん。予と
 りて視之とをえ。そは趣向は国俗の浮世物真似とりひものめたる。巧ま
 る條理は一箇もなし。彼の乱朝悪俗の情態とよく寫せしのみ。彼書舶來
 せしより以來。書名漸々此間も高うら。あつて雅俗只そは書名と知れ
 ども。得てよく是と讀るもの稀。見ふ彼書中ら。方言洒落のめらうら
 あつてもなり。且通俗の譯文なり。彼の俗語は疎まりの。讀絲を知らぬ

と論一頁。彼書は縁りて戯し。今這策子と著せども。敢て鳳洲の擧げと
 へむ。あの編發端八卷のどらる。素より彼書よる所。咸予が意匠は出
 る。是より下もそれ猥褻の甚しむる刪去りて。易らに獎善の語説を以
 し。その取るべきはあまは取らざり。ぬ所と放下して。別は新研を發
 まのりあり。あの故は翻案筆削總て傾城水滸傳と同どく。具眼の
 看官知音の諸君子。甘一鹹一と舐嘗て。作者の用意と知るところ。亦
 九三冊子とめて見るころ。和漢その差あるをわのん

第四十六 同續篇

和漢小説稗史の作者。善惡邪正賢不肖動靜云為山水景致。ごごま
 づそは苦樂と喫め。然して後よ作るふらご。智慧のりものちかの

づら。世を觀し情を通して。知らばとつみ所あり。知るころも文あり
 且。亦情態を寫す難う。嗚呼談何ぞ容易あらん。かゝる故は張竹坡
 が金瓶梅の讀法。金瓶梅の人と。是誤するものあらば。人々ご
 う。是と誤る。夫人ふ賊と説くもの。原戒を示す。然るを聴く者これ
 よ因て。遂に賊と做まると。おと説くもの。過らば。聴く者ごう。賊
 とあるもの。云云と。然んつらける。這批語寔に説得て好し。譬は提婆
 達多。惡も原是世尊の説く所。世尊提婆が惡と做て。あよ初てその
 情を通して。あの義と説明し。や。歌人の居るご。名所を知る。歌人必
 ざるの地と踏で。初る名所を知るふらご。一事を推て萬理小涉ら。寓
 言もまた勸懲の捷徑ありて。ゆんご。や。中あも物の本は作

者くと澤山さうふ。人まりのども詭やまらる。這首で源語那首で水
許和漢今昔技萃あふ犬の齒あふ蚤より罨らる。人あらまぬ死
籍へ又只花見虱より多く背と祇店より。とをうらまへるも亦敷
し漏れぬ自恣荒唐果敢あは枝ふ年長ても大象へ遊たぬ兎園の冊
子合巻その悲しき。何書うも席へ。情態景地印とつて。寫
み足らぬ兒戯の本心弥敢ふ喘りても。九尺店でも使まぬ。二間の鎗梅金
瓶梅高き書名と假初著せしより既したる。今茲ハ二編と接木の室
咲開籠る間もゆふと。だうく急業一夜豪根もあは言とあり貞
枝葉と麗て香よ匂ふ。花の大江戸の名物といをもあは策子の序む
き。草稿もせぬ筆ふ信し

第四十七 同續篇

清の阮葵生が茶餘客話云。狗と屠る者の狗これと吠牛と解くその
の牛あまし觸ると。夫狗と牛との智慧をけれども。自然は等類の怨と知
て。或ハ吠或ハ觸る。物類相感天理は出づ。善惡應報類してまらる。あ
りて浮屠家の五戒。殺生とて第一義とす。彼狗と屠り牛と解く者。今
生して。狗吠は遭ひ牛觸は遇ふとる。身後の應報あはしと得んや。
然とも。善を行ふて福なれたる者。不善を做るも禍あはりのなり。是故
よ世の人惑ふく。動もまれば天と怨て。善惡應報ふと思ふハ。亦その
遅きと速きとらる。終は報ふと知らざる。然ばあを書ふ云ハ。や
作善降之百祥。作不善降之百殃と。あは應報の速きとらるの

又易經云と見と。積善家必有餘慶。積不善家必有餘殃と。ある應報の遅き候りのみ。蓋善と做者。その身より延年福壽。兒孫より立身栄達。血脈との相續を。又不善と做者の。其身より短命横死。子孫よりても凋落廢絶。他人代りて家に入る。世ふ人の父祖たるもの。身の為め。兒孫の與を思ふ。懣て不善と做まらざらば。善惡應報遲速なり。近きれば必む其身より報ひ。遠きれば必む兒孫より報ふ。歲月との論難。應報の理と知ましく思ふ。童蒙先這金瓶梅瓶看るべし。

第四十八 同續篇

天道の善より與む。善は天理の公あり。人公を歡ぶ所以は。天理の自然な

はばあり。是より三尺の童子も。又八旬の翁媪も。人の善惡邪正と見まば。彼は惡此は善と。辨知ると公然と。然るを已が上より在りて。是非の境も惑はぬ。其は何ぞと尋らふ。我屍に決して臭うるを。人の屍に最臭きが如く。人の邪正を知る手際りて。己が愆非理惡と。善と思ふて諫と怒る。手前勝手の臆断の。迷ふと移らぬ愚夫愚婦と。佛は一切衆生と名づけり。か世話やめり。經文多し。佛の善巧方便は。似たる小説神史と。言勸懲と宗と。つら中も最小にて。淺むるも用意あり。新版新編金瓶梅。今茲に既六集の筆の肇ふ似げも。堅勁勇しいとかくも。述べて作し。板元の責と塞む久哉。嗚呼其哉吾

考らる。吾夢ふが秀稿と得ざるのうら。是と自序と云

第四十九 同續篇

夫忠恕よ一物と憐れ。辭謙ふして驕らむ誇らば。是と稱て善人とりん。善人の徳行ハ必しも誌まらん。誌まらん則外あり。人ハ善と勸ん為る。又残忍ふして慾と恣ふ。奸佞ふして人と害ふ。是と箴めく悪人と云。悪人の支へ述るふ得堪む。其とも筆小載まる。一ハ人の悪を懲さんとする。其善と見し。悪を瘡と。新編金瓶梅とりん。年々編み。歳々小鐫る。割刷氏の小刀子の塵積り。第七集も。ハの巻ある糸口と。とく日ア不五萬歳と祝ふ新板物の本作者ハ古稀ふ。又四の緒の琵琶の湖それる。硯の海の浅をうら。趣向と今茲も御覽と。尚若いでるおびさうませ

ぬりと。正辨空言扱もせら。皆是腹の稿の。話説と画はかく合巻よ自序ま

第五十 同續篇

若夫人の賢不肖と。善悪邪正と。知ま欲さ。蠶と蜘蛛の行ひと見と。是と思ふよあくらふ。蓋蠶ハ絲と吐き。蜘蛛も亦絲と吐く。其吐く所の物異あ。絲ども。蠶ハ絲よ作り。綿よ為り。絹よ成る。綾羅錦綉の愛たれも。その物をければ製る工と得む。其人ハ益あるも。繭と為るふ及びさへ。則其卵と遺せり。便是身と殺して仁と為る者よ喪ら。又蜘蛛の行ふ所。其絲とめて網よ作り。小虫と係る。咬ふのみ。然ハ大厦高樓の檐も。竹垣籬笆の垣あ。久しく帯せざる。此が為よ汚されて。其本色と失へり。倘膳中ふ入ると。人ハ殺まの大毒なり。恁ればその策子ハ見

一たる。武松琴柱の蠶よ似く。阿蓮啓十八蜘蛛よも如ざる。因果靚面の
理へ這第八集よ具あり。何と小兒輩がてんうく

第五十一 同續篇

若夫花鳥風月の如き。世の人は是と愛ざるのみ。是と愛るも各差なり。詩
歌の為よ愛る者と風流士と。飲食管絃の為よ愛る者と疎人と。賣買
利と射る為よ愛る者へ賈堅あり。开が中ふ。花より風雨の暴と怕れ鳥
よの桓山の哀別と慨しみ。風よの萬籟の噪き。厭ふべく。月よの浮雲の
障多く。観る者へ幽静悟道の達者よ。花鳥の為よ知己とゆえま
し。然ば果敢る策子物語と好も。亦是よ似たる事なり。趣向も巧よして
勸懲の正きと歡ぶ者と。真の看巧者と。又巧拙と勸懲と。官へ。只

浮たると歡ぶと句欄下の看官と。又唯画を見て文と見ぞ。只人よ話さ
せ。其概畧と知ま。欲まは是白髮の小兒よ。書肆の得意多。ぬもあ
る。抑々這金瓶梅も。彼三等の看官ありん。左も右も。勝者の強ま
よ團扇と抗ぎ。めやハ

第五十二 同續篇

物始の必終あり。年終始の門松の冬終の煤掃竹と涯と。櫻咲く
野の花席の紅葉も。山の毛氈と終と。酒ハ礼も始りて乱と終り。色ハ
惑ひも始りて別と終る。稚子毎の竹馬。老ての後の杖と終と。紅顔と
新婦の雪の白髪。岳母と終と。浮世ハ走馬燈の輪廻りて尽る。と
ある。只人の理りのと。善悪應報の虚しく。ざる。亦亦環の遠

るが如し。一善進めば一惡退く。便是正路あり。倘惡人時と得て。行はる
 とあまれば。善者隱せざるごとし。得む。此は是邪徑也。猶勅風猛雨の五
 穀と破り。瘴氣毒水の魚鼈と害ふ。亦何ぞ異なるべき。然しとて。天運正
 路は復りて。日月隈なく照まるとん。惡棍亡び。善人榮え。其名兩まが
 らせふ。貽りて。後車の警は。彼西門屋啓十郎。多金阿蓮等。幾層の
 歹人。一旦不義の言と做せむ。大原武二郎。武松。孝悌義勇の大刀風よ
 芝盡さる。大團圓まで。知音の為ふ。そのせいの。刊行中絶あさる。今
 や發兌の時。至りぬと。甘泉堂の求る。まふ。十集揃の全書とふ。たる。
 終りらる。て。作者の用心。始より。て。意味らる。と。有眼不具。眼乖不乖。知
 る。を。知らぬ。も。推並て。拍掌驚奇。せざる。を。か。く。る。の。書。の。終。り。と。亦。始

より。正木の蔓繰り返して。長く久しく世の看官。不弄。幸。り。と。
 手前勝手。壽。の。筆。と。代書。に。任。せ。序。を。

第五十三 女郎花五色石基

在昔楚國。干將。の。鍛冶。其妻と。媧。耶。と。り。時。楚王の妃。彼身
 肥。る。故。ふ。夏。日。の。暑。ふ。堪。む。日。夜。鐵。の。柱。と。抱。ま。く。快。と。思。ふ。程。み。遂。に。孕
 て。鐵。丸。と。生。ぬ。楚王。其。鐵。と。り。て。干將。媧。耶。に。劍。二。口。作。ら。し。む。そ。は。陰。陽
 の。二。劍。と。干將。媧。耶。と。名。づ。け。たり。干將。を。け。一。劍。と。楚王。に。獻。せ。と。残。る。一
 劍。と。秘。して。出。さ。ず。王。是。と。知。り。怒。て。干將。媧。耶。と。殺。し。ぬ。干將。の。子。の。名
 を。赤。と。し。眉。間。の。廣。さ。一。尺。り。り。れ。バ。時。の。人。綽。號。して。眉。間。尺。と。喚。做
 たり。王。亦。是。と。知。り。て。赤。と。殺。さ。ま。く。欲。む。事。甚。急。あり。赤。彼。劍。と。抱。て

逃て山中み小在り。親の仇あの報あひづつと悲あむ。且歌うたひ且泣なぬ。其時客きやくあり。赤あかく告つて道みちく。汝なんぢを死し骸がいと汝なんぢの首くびとを吾われは授まぐ。吾われ汝なんぢの為ためは楚王しやうわうを殺ころして。怨うらみを復たさんといふ。赤あか飲のみびてみぐ。勿なれけり。然しかどもその死し骸がい倒たる。客きやく則すなはち汝なんぢ死し骸がい向むかひ。吾われ汝なんぢ叛かるるを誓ちかひ。即倒すなはち客きやく其その劍けんと赤あか首くびとを齋いへ。楚王しやうわう告つて實じつ檢けんと請こへり。王わう赤あか首くびと見みる。小猶せうじゆう生なるる。客きやく亦また王わう薦すめて煮なさすむ。既すでに煮なるる。三日三夜さんじつさんやして。汝なんぢ首くび爛なるる。王わう訝いりて釜かまの蓋ふたを開ひらく。是こゝを見みまくる時とき。客きやくを背うらより。劍けんを抜ひいて王わうと撃うつ。王わうの首くび釜かま中ちゆうに落おち。匣ひらりて戦いくさふ者ものは似にたり。客きやく是こゝを見て亦また自みづから刎きねて。三頭釜さんづつかまの中ちゆうに匣ひらりて。爛なるる。亡なるる。といふ話はなし。瑯琊らうや代だい醉さい篇へん見みえり。實じつは伍子胥ごしよの支しは由よしり。作さ設せけり。

當初まづの小説せうた。是こゝ此こゝの土どふり所ところの眉間尺まゐんせき巴はの紋もんの権輿けんいありと欲う搜さう神しん記き卷まきの十二じふにふも。赤あかくこと載のせられども。その畧りやく文ぶんのみ。然しかるるを太平記たいへいき大塔宮だいたくみやうの土牢つちのうらの段くだ。右みぎの全文ぜんぶんと引用いんようせられ。世よの人ひと今いまはよく知るしる。吾われ亦また件くだんの事ことと。本篇ほんぺん撮と合ごうして。胎たと奪うひ骨ほねと換かへり。一種いっしゆの主稿しゆこうと。又また唐山とうざんの俗語しやくご小説せうた。五色石ごしきせきの書かきの名なを借かりて。女郎花じやうらうが五色石ごしきせき臺たいと命いのちる。一いっの章魚しやうぎよの櫻おう者もの。石决明せきけつめいの醋貝そくかい堅かき所ところに柔なくみり。細工さいこうを流ながす。結局けつくりくまで看みる。諸君子しよくんし作者さくしやの用意よういを知らん。あま五六集ごろうごく續つづ出でる。長物語ちやうぶつごの緒いとと。けいひん初はつる春霞しゆんせき四方しやうほうの長視ちやうしとたのむ。代書だいしよの筆ふでをかり。あまいづ。童蒙どうもう心こゝろをなす。まふ。老らう似にげなく。弱じやくらう序しよを。

第五十四 同續篇

邈小唐山の故事と思ふ。真舜の貴きと帝王より。去るるを年五十ふ
て猶親と慕ふと有り。是より大孝と云。人生と云四五歳迄は。乳と吸ひ
母と慕ふ而已。其成長る小及びく。賢と云く不肖と云く。嗜欲好憎るはと
と得を。開ケ中ふ性の最美き。嘗て教と俟むて。行ひ良善ある故。孝
義と門閭に表せらる。名と揚げ親と顯る者。往々是なり。不肖者は是
を見て。例の事として羨む。一とび悪く染る小及びく。放蕩不頼せざ
る。と云ふ。世よ人の親たる者。各其子と慈と。愛で眷養する。但克
く其子小教るの稀あり。此故に顔氏家訓より。らく。妻小教るの初見。小
り。子小教るの童年。小在り。其子の稚う。一時より。理義賞罰と正く。と
教訓嚴密と。されを。後よ至り。亦是也。如何と云。其子の悪

と知らざる故。愛と満と。懲と事と。父子相刺する時。至りて。怨罵る
とも。甲斐や。抑親の愆。已茲に心あり。漫小兒戯の冊子と
綴りて。彼惑ひと醒さ。欲を。本編も亦介。前集行きて。書肆復二集
と求むる者。急あり。因て婦幼の代筆。稍その責と塞ぐ。と云ふ

第五十五 同續篇

鸚鵡能言へども飛鳥と離る。狸うよく言へども禽獸と離る。聲色使
克似されども。人異あれ。自声と離る。蓋人の適所。適き。自ら適く所
小適む。蒼蠅附驥のあり。貌あり。是莊周の笑ふ所。佛も醒し易。と云ふ。
是と無明の生酔と。文墨も亦相似する。数百年の下よ生と。数
百年の上ある奇文と。最自由と折衷して。りて一家と做せる者。東坡の所謂

換骨奪胎博識多才是也。克其其次の剽竊摸擬古哲の佳文を竊取りて。筆ふ花を添るといふ。夫よりも猶酷いなり。其世其時と同一なる。忌憚の関へまゝ。先達新奇の大筆の局と結びしも。結たぬも。胡椒の圖圖香と縮丈しと。のん己が物と做せらる。開の利と走りて義と疎き。人の好もよ成るといふ。譬は他の犢鼻褌とめて。角觥を攪ると。鄙言よ似たる者ふらう。とせんや。とをうり。吾も亦。同ト田甫の瘦牛房煮たり。炙たりせらる。巧拙十把一勝の。足と一い。洗得む。長生まれ。耻多き。兒戲の冊子も。毫の毫の人の足跡と踏ぬ。獨酌一本生酒。嫌ひ。べのらまの甘と旨と大人気も。今茲の愚作は是のみ。五色石臺女郎花。蒼の勿論實も。第三集を綴るふと。

第五十六 同續篇

毀譽褒貶も人の好憎より出づ。或人の冊子と関して。爪弾いて嘲けら。女子の柔和ふ。軟弱は織績ぎ衣と縫ひ。手書き且内と治ると良と。尚女子あり。其勇敢義秀親衛は勝るといふ。そ人倫の異常而已。世の婦幼是と見え。羨む心あり。時。傲き事毎に粗暴しく。良人と尻に布もあらん。その故は甚害なり。自他の女子等眼を閉て。見を聞おと。つと。いひ。後又人なり。その嘲嘘と解きて曰。夫恭平の世。情夫多く。戦国小の勇婦あり。昔唐土姫周の時。孫武子も。呉宮も女兵と操り。のり。非常に備へ。況這冊子も。五勇婦も。烈女韓糸の後の身も。遺悲と忠孝も。果せ。婦幼等是を見て。学ば。く。企及ぶ。き。情夫

是より由り羞て生活と獎むべく少女も是より由り耻て浮る娛樂と做さ
 ト彼人情と歎唱へたる娼娃の書と同トうらむ。何の害り是ららんや。作
 者の用心斯くの如し。己まんに。臂を敲いと歌ふらく水道の水溢て濁らば。
 戲墨の筆を洗ふべし。澄らば面よ吹破く。無明の酔を醒まべし。去て亦共よ言む。
 作者あの一論とらち聞て。腹と抱へて批して道ら。難波の浦のよりりも。身
 と尽してあを悟りもまれ是非も看官の巧拙よりん。兒戲の冊子を論むら。
 不狂人も走らふ似たり。只初春の笑草も。詞の花を開かせぬ。吾も可もまなく不
 可もまなく。替らぬ處が嗚呼目出さぬ。愛さぬ哉

曲亭馬琴戲作序文集終

御子神藏書

入カニ

010190525479

